

特性感謝・特性負債感と制御焦点理論に基づく 行動制御モードとの関連の検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科 吉野 優香

筑波大学人間系 相川 充

The relations between trait gratitude, trait indebtedness, and self-regulation systems based on regulation focus theory

Yuka Yoshino (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Atsushi Aikawa (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Based on regulation focus theory, this paper examines the relations between trait gratitude, trait indebtedness and self-regulation systems (promotion focus and prevention focus) when there are positive correlations between trait gratitude and trait indebtedness. In Study 1, we test the relations between trait gratitude, trait indebtedness, and the tendencies for both promotion focus and prevention focus. In Study 2, we test the relations between trait gratitude, trait indebtedness, and the motivations for both promotion focus and prevention focus. The results indicate that trait gratitude is correlated with the tendency for promotion focus and the motivations for both promotion focus and prevention focus. Trait indebtedness is correlated with the tendencies for both promotion focus and prevention focus tendency and the motivation for prevention focus. These findings indicate that pairwise correlations do not exist for both trait gratitude and promotion focus and for trait indebtedness and prevention focus.

Key words: trait gratitude, trait indebtedness, regulation focus theory

社会的交換によって生じる感情には、ありがたみなどの感謝感情と、申し訳なさやすまなさなどの負債感情の2種類があると指摘されている (Mathews & Shook, 2013; Peng, Neilissen, & Zeelenberg, 2018)。感謝感情と負債感情はどちらも、特定の状況下で生じる状態的な (state) 側面と、個人差である特性的な (trait) 側面の2側面に分けて研究されている (Henderson, 2009; 吉野・相川, 2018)。感謝感情の特性的側面である特性感謝は、「個人が、ポジティブな経験や結果をもたらした他者の慈善に対し

感謝の感情を抱いたり、気がついたりする一般的な傾向」(Emmons & Shelton, 2002)と定義され、負債感情の特性的側面である「特性負債感 (trait indebtedness)」は、「個人がポジティブな経験や結果をもたらした他者の慈善に対し負債の感情を抱いたり、気がついたりする一般的な傾向」と定義されている (吉野・相川, 2018)。

感謝感情と負債感情は、それぞれの研究の文脈において動機との関連が指摘されている (Greenberg, 1980; MaCullough, 2001; Mathews & Shook, 2013)。特に、Mathews & Shook (2013) は、感情の経験と、動機の質的な種類との関係を明らかにするため、特性感謝、特性負債感と、制御焦点理論 (Higgins, 1997;

Higgins, 1998) における2種類の行動制御モードとの関連を検討した。制御焦点理論とは、快樂原則 (Freud, 1920/1998 須藤沢, 2006) の追求に、快・不快の質的な内容を考慮した2種類の行動制御モードを仮定した理論である (尾崎・唐沢, 2011)。2種類の行動制御モードとは、促進焦点型の行動制御モードと予防焦点型の行動制御モードである。

促進焦点型の行動制御モードは、理想・願望を実現することや利得の獲得に焦点を向ける。促進焦点型の行動制御モードにある個人は、ポジティブな結果の存在に接近し、ポジティブな結果の不在を回避しようとする。他方、予防焦点型の行動制御モードは、義務・責任を果たすことや損失に焦点を向ける。予防焦点型の行動制御モードにある個人は、ネガティブな結果の不在に接近し、ネガティブな結果の存在を回避しようとする。

制御焦点理論における上記の行動制御モードは、個人の行動傾向として扱われる特性論と、状況に依存した行動の傾向として扱われる状態論のどちらにおいても用いることができる (Crowe & Higgins, 1997; Higgins, 1997; Scholer & Higgins, 2012)。本論では、言及している制御焦点理論が、特性論であるのか状態論であるのかを明示するため、促進焦点と予防焦点の呼称を、特性論である場合には「特性促進」、「特性予防」とし、状態論である場合には「促進焦点動機」、「予防焦点動機」と呼称する。

Mathews & Shook (2013) は、感謝感情と負債感情が、「善意の有無」や「返報期待の有無」によって区別される (Tsang, 2006; Watkins, Scheer, Ovnicek, & Kolts, 2006) ことから、特性感謝、特性負債感と特性促進と特性予防のそれぞれは、対応関係にあると予想をした。つまり、特性感謝の高い個人は、利益供与者の善意に注意を向けやすいため、感謝感情を経験しやすく、特性負債感の高い個人は、利益供与者との社会的交換における返報規範に注意を向けやすいため、負債感情を経験しやすいと予想したのである。検証の結果、予想を支持する形で、特性感謝と特性負債感の間には、負の相関関係がみられ、特性感謝と特性促進の間、および特性負債感と特性予防の間に、正の相関関係がみられた。

Mathews & Shook (2013) の結果は有益であるが、次の2点に関して検討の余地があると指摘できる。

第1に、感謝感情と負債感情が相反して生起するという点である。Mathews & Shook (2013) の結果では、特性感謝と特性負債感、有意な負の相関係数を示していた。この結果は、アメリカにおいて感謝感情と負債感情を共に扱った従来の研究においても同様に示されている (Watkins et al., 2016) ため、

妥当な結果であるのかもしれない。しかし、本邦においては、感謝感情と負債感情は、被援助場面において共起することが示されている (蔵永・樋口, 2011; 吉野・相川, 2018)。同一の被援助場面において、感謝感情も負債感情も共に経験されることは、特性促進と特性予防の行動制御モードの傾向が、善意などの価値への注目や返報規範への注目を左右するために、感謝感情や負債感情の経験に影響を与えるという Mathews & Shook (2013) の予想とは一致しない。

その一方で、Mathews & Shook (2013) が指摘した、感謝感情と、善意や利益への注目との関連、および負債感情と、返報規範との関連は、広く支持されている知見でもある (相川, 1988; Algoe, Haidt, & Gable, 2008; Watkins, 2014)。感謝感情と負債感情が共起することと、広く支持されている知見とを踏まえると、特性感謝と特性負債感や、感情経験自体の影響により、個人の行動制御モードが左右されると予想できる。つまり、特性感謝や特性負債感の高さが、個人をとりまく善意や価値への注意を向けやすくしたり、返報規範を意識しやすくしたりする結果として、特性感謝、特性負債感、行動制御モードとの関連がみられると考えられる。この予想であれば、行動制御モードの個人差が感情経験の個人差と一対の対応をしていない場合においても、感謝感情、負債感情と、両感情が有する価値や返報規範の特徴との関連の間に齟齬が生じない。

第2に、制御焦点理論における行動制御モードを特性論として扱っている点である。Mathews & Shook (2013) は、2つの研究を行い、研究1では、制御焦点理論を特性論としてとらえ、特性感謝、特性負債感と特性促進、特性予防との関連を検討した。研究2では、制御焦点理論を状態論としてとらえ、行動制御モードの一方が優勢となる操作を参加者に対して加えることで、行動制御モードと特性感謝、特性負債感との関連を検討した。研究2では、確かに状態論として制御焦点理論を扱い特性感謝、特性負債感との関連を検討しているが、ダミー変数とした行動制御モードの操作の違い (促進を優勢とするか予防を優勢とするかの違い) が、ポジティブ気分、ネガティブ気分よりも、特性感謝、特性負債感を予測するかどうかの検討にとどまっている。状態論における行動制御モードの操作方法は、制御焦点理論の研究において確立されているものではあるが、操作チェックが行われていないため、状態的に何が変化したのか操作の妥当性が把握できない。

これに加え、状態的な行動制御モードの操作が、ポジティブ気分、ネガティブ気分よりも、特性感謝、

特性負債感の得点の予測に影響を与えているという結果を、行動制御モードによって感謝感情や負債感情の喚起が左右されることの根拠として扱うことも妥当な論理であるとは言いがたい。対人相互作用の結果によって生じる感謝感情や負債感情は、ポジティブ気分、ネガティブ気分よりも状況的な影響を受けると考えられるからである。状態論としての制御焦点理論の観点の検討が不十分であることから、特性感謝と特性負債感や、感情経験自体の影響により、個人の行動制御モードが左右されているという本研究の予想は、検討に値すると言えよう。

以上より、本論文では、感謝感情と負債感情が共起することを前提とし、特性感謝、特性負債感と、制御焦点理論の行動制御モードとの関係を明らかにすることを目的とする。この目的の遂行のため、2つの研究を行う。

研究1では、Mathews & Shook (2013) の知見に関して、本邦のデータにおける再検証を行う。特性感謝と特性負債感が相反していないと予想されるデータにおいて、特性感謝、特性負債感と、特性的な行動制御モードとの関連を明らかにする。

研究2では、制御焦点理論における行動制御モードを状態論として捉え、特性感謝、特性負債感と、状態的な行動制御モードとの関連を明らかにする。Mathews & Shook (2013) は、行動制御モードの変化が特性感謝、特性負債感の程度を左右すると予想していたが、本研究では、特性感謝、特性負債感の高低が、状態的な行動制御モードの変化を引き起こすと予想し検討を行う。

状態的な行動制御モードに関しては、向社会的行動の動機に着目する。感謝感情と負債感情のそれぞれを経験した受益者は、被援助経験後に遭遇した援助場面において向社会的行動をとりやすくなることが示されている (Bartlett & DeSteno, 2006; Greenberg & Frisch, 1972)。そこで、被援助経験時に、受益者であった人物が、そのあと利益供与者として、第三者に対して行う向社会的行動の動機を、状態論における制御焦点理論として解釈し、制御焦点動機とした。被援助経験時に受益者であった利益供与者自身にとって、向社会的行動を行うことが利益の獲得と関連する動機を「促進焦点動機」とし、被援助経験時に受益者であった利益供与者自身にとって、向社会的行動を行うことが損失の回避と関連する動機を「予防焦点動機」として扱うこととした。

研究 1

目的

感謝感情と負債感情が共起することを前提として、Mathews & Shook (2013) を追試する。特性感謝、特性負債感と、特性的な制御焦点理論の行動制御モードとの関係を検討することを目的とする。

方法

調査対象者 関東圏の大学で大学生に質問紙調査を行い、回収できた215部から、リストワイズ削除により欠損値を除いた186名 (男性: 93名, 女性: 93名, 平均年齢 20.05 ± 1.63 歳) を分析対象とした。なお本研究内の全調査は、筑波大学人間系研究倫理委員会での承認を受け実施された。

質問紙構成 特性感謝は、対人的感謝尺度 (藤原・村上・西村・濱口・櫻井, 2014) で測定した。藤原他 (2014) の尺度は、児童用であったため、本研究では7件法で回答を求めた ($\alpha = .94$)。特性負債感は、心理的負債尺度 (相川・吉森, 1995) で測定したが、この尺度の中の「恩」と「感謝」に関する2項目、および「私は見知らぬ人から助けもらったときには、お返しする必要はないと思う (逆転項目)」を分析対象から削除した ($\alpha = .79$)。

特性的な制御焦点の測定項目 特性的な制御焦点の測定には、促進予防焦点尺度邦訳版 (以降、PPFS 邦訳版尺度と表記: 尾崎・唐沢, 2011) を用いた。この尺度は利得接近や損失回避に関する目標志向性の強さを測定したものである (尾崎・唐沢, 2011; Summerville & Roesse, 2008)。肯定的な結果などを獲得したいと思う傾向を測定する利得接近志向8項目 ($\alpha = .85$) と、否定的な結果などを防ぎたいと思う傾向を測定する損失回避志向8項目 ($\alpha = .79$) の計16項目で構成されている。回答は、「1: 全くあてはまらない」から「7: 非常にあてはまる」の7件法で求めた。

本論文では、「利得接近指向」を「特性促進」、「損失回避指向」を「特性予防」と呼称する。

結果

各尺度から評定値の平均値を算出し変数を作成した。平均値と標準偏差は、Table 1に示した。

各変数間の関係 Mathews & Shook (2013) と同様に、特性感謝、特性負債感の間と、特性促進、特性予防の間のそれぞれの関係を検討したところ、それぞれ正の相関関係 ($r_s = .24, .41, p < .001$) が見られた。そこで、4変数の間の関係を検討する際には、関係を見る2変数以外は、統制変数とした偏相

関係数を算出することとした。

特性感謝と特性的な制御焦点の関係 特性感謝と特性促進の間の偏相関は、特性負債感と特性予防を統制したとき、有意な正の関係を示した ($r_p = .30, p < .001$)。特性感謝と特性予防の間の偏相関は、特性負債感と特性促進を統制したとき、有意な関係を示さなかった ($r_p = .10, ns$)。

特性負債感と特性的な制御焦点の関係 特性負債感と特性促進の間の偏相関は、特性感謝と、特性予防を統制したとき、有意な正の関係を示した ($r_p = .15, p < .05$)。特性負債感と特性予防の間の偏相関は、特性感謝と特性促進を統制したとき、有意な正の関係を示した ($r_p = .19, p < .05$)。

考察

研究1では、感謝感情と負債感情の共起を前提として、Mathews & Shook (2013) で検討されている、特性感謝、特性負債感と、特性的な制御焦点である特性促進と特性負債感との関係を再検討した。

特性感謝と特性負債感の間には、正の相関関係があり、両感情が共起するという前提と一致する結果を示した。特性促進と特性予防の間にも、正の相関関係がみられた。制御焦点理論に基づけば、特性促進と特性予防は、互いに独立しているはずであり、この結果は、尾崎・唐沢 (2011) と異なる点である。しかし、Mathews & Shook (2013) でも、特性促進と特性予防の間に5%水準で有意な正の関係 ($r = .16$) が報告されていることから、制御焦点理論における促進焦点と予防焦点が独立であるとする知見は頑健ではないようである。

特性感謝、特性負債感と、特性促進、特性予防との間の関係性に関しては、次のことが明らかになった。関係を検討する2変数以外の変数を統制変数としたとき、特性感謝は、特性促進と正の関係を示し、特性予防とは有意な関係がなかった。特性負債感は、特性促進と特性予防のどちらも、有意な正の関係を示した。すなわち、感謝感情と負債感情が共起することを前提としたとき、特性感謝が高い個人の場合には、利得への接近指向を強く持ちやすく、

特性負債感が高い個人の場合には、利得への接近指向も損失への回避指向も、どちらも強く持ちやすいことを示している。

この結果は、Mathews & Shook (2013) と異なる結果である。Mathews & Shook (2013) では、特性感謝と特性負債感の間には有意な負の相関がみられ、特性感謝は、特性促進と特性予防との間にそれぞれ正の相関関係と負の相関関係を示していた。一方、特性負債感は、特性促進との間には関係は見られず、特性予防との間に正の相関関係が見られていた。つまり、研究1とMathews & Shook (2013) との間には、特性感謝に関して、特性予防との関係に違いがあり、特性負債感に関して、特性促進との関係に違いがあった。これらの違いから、感謝感情と負債感情が共起することを前提としたときに、特性感謝と特性負債感は、特性促進と特性予防と対の関係にあるのではなく、互いに重複する影響を持つ可能性が示された。具体的には、感謝感情を経験しやすい個人は、物事を促進焦点的にとらえやすい個人であるが、予防焦点的なとらえ方もすること、負債感情を経験しやすい個人は物事を促進焦点的にも予防焦点的にもとらえやすい個人であることがわかる。促進焦点、予防焦点はどちらも、人間の行動制御モードとして必要なものであるため、感謝感情と負債感情の両方を経験しやすい個人は、バランスのよい行動制御モードを保っている可能性がある。

研究1では、Mathews & Shook (2013) の指摘と異なる結果が得られたが、この結果は、促進焦点、予防焦点の間に有意な相関がみられるデータにおける結果である。また、特性的な制御焦点理論の尺度は、生活の全般的な傾向を尋ねているため、本論文が扱う制御焦点動機とは結果が異なる可能性がある。これらの点について、制御焦点動機の項目を作成し、検討する必要がある。

研究2

目的

研究1の結果を受け、研究2では、促進焦点動機と予防焦点動機を測定する項目を作成し、特性感謝、特性負債感との関連を検討することを目的とする。

特性的な制御焦点は、感謝感情と負債感情の特性面との関係 (研究1: Mathews & Shook, 2013) や、行動抑制/行動促進理論との対応関係が示唆される (尾崎, 2011)。これらの知見は特性的なレベルのものであるが、制御焦点動機においても同様の関係が一定程度見られることが予想できる。研究1の結

Table 1
研究1における変数の平均値と標準偏差

	平均値	(標準偏差)
特性感謝	5.90	(0.91)
特性負債感	3.76	(0.50)
特性的な 制御焦点		
特性促進	4.49	(0.97)
特性予防	4.55	(0.95)

果から、制御焦点動機と、特性感謝、特性負債感のそれぞれの間に予想できる関係は、次の3点である。促進焦点動機と特性感謝の間に正の関係がある。予防焦点動機と特性感謝の間に正の関係がある。予防焦点動機と特性負債感の間に正の関係がある。

制御焦点動機の項目は、PPFS 邦訳版尺度や制御焦点理論における促進焦点や予防焦点の定義やその特徴に基づき、作成を行う。本論文が言及する制御焦点動機は、向社会的行動を行う際の動機であるため、向社会的行動を行う援助場面を提示し、向社会的行動を行う理由を尋ねることによって、制御焦点動機の項目に対する評定値を得る。

制御焦点動機の項目を新たに作成するにあたり、関連が予想される他の変数との関係も検討する。制御焦点動機の項目は、制御焦点理論に基づき作成されることから、対応する特性的な行動制御モードである特性促進と特性予防との間に関連があると予想される。つまり、促進焦点動機と特性促進、予防焦点動機と特性予防の間に正の関係が示されると予想できる。

行動制御理論の1つである行動抑制／行動促進理論には、「接近ドライブ」と「回避ドライブ」の行動制御の志向性が含まれている。接近ドライブは、欲しいものを手に入れようとする志向性の強さを表し、回避ドライブは、苦痛やリスクを避けようとする傾向を表す(安田・佐藤, 2002)。したがって、制御焦点動機と行動抑制／行動促進理論との関係は、促進焦点動機と接近ドライブの間、予防焦点動機と回避ドライブとの間のそれぞれに正の関係が予想できる。

以上の予想に基づき、制御焦点動機と、特性感謝、特性負債感との関係に加え、特性促進、特性予防および、接近モード、回避モードとの関係も検討する。

方法

調査対象者 複数大学の大学生に質問紙調査を行い、回収できた314部から、質問に対し無回答や複数回答がみられる者(40名)や、未記入を含む日本国籍ではないもの(27名)¹⁾を、リストワイズ削除により除いた245名(向社会的行動の対象者との関係性：友人条件116名(男性56名・女性60名)、他人条件129名(男性61名・女性68名)、平均年齢19.95±1.04歳)を調査対象者とした(回答率：78.0%)。

質問紙構成 場面想定法による質問紙調査を実施した。ビネットによる被援助場面の提示後、援助場

面を提示し、向社会的行動の測定項目・制御焦点動機を測定する項目、および特性尺度で構成した。質問紙は、向社会的行動の対象者との関係性ごとに、調査対象者が向社会的行動をとる対象が友人の場合と他人の場合の2種類を作成した。

援助場面のビネットの内容 大学生にも想像しやすい、援助の必要な困窮している場面として、自転車をドミノ倒しにしてしまった場面を用いた。この場面は、学部生4名と大学院生の話し合いにより、困っている他者として、友人、他人を問わず想定でき、大学生が遭遇しやすくイメージがしやすいとする理由から選ばれた。ビネットの内容は、焦っている様子の友人または他人が自転車をドミノ倒しにしてしまい困っているという場面であった。

向社会的行動の測定項目 援助場面において自転車を倒してしまった個人(友人または他人)に対してふるまえると予想できる向社会的行動として、声をかける、自転車を起こす、自転車を並べる、の3点を考え、次の3項目により、向社会的行動を測定した。質問項目は、「あなたは、「大丈夫ですか?」と声をかける」、「あなたは、一緒に自転車をおこす」、「駐輪場のスペースに収まるように自転車を並べる。」であり、その行動を「0:しない」か「1:する」かの2件法で回答を求めた($\alpha=.52$)。

制御焦点動機の測定項目 制御焦点動機の項目は、次の2点を基に作成した。まず、制御焦点理論の定義および、PPFS 邦訳版尺度(尾崎・唐沢, 2011)に基づき項目を作成した。促進焦点は、利得の存在に注意が向いている状態であり、予防焦点は、損失の不在に注意が向いている状態である。PPFS 邦訳版尺度においても、「利益を得ることよりも、損失を避けること(尾崎・唐沢, 2011, 項目18)」がある。そこで、促進焦点動機に「メリット」、「自分に役立つ」、「自分のためになる」の単語の入る項目を作成し、予防焦点動機に「デメリット」、「悪いこと」の単語の入る項目を作成した。また、促進焦点は理想、予防焦点は義務にそれぞれ注意が向いている状態でもあり、PPFS 邦訳版尺度においても「理想」、「希望」と「責任」の表現が用いられている(尾崎・唐沢, 2011, 項目1, 5, 6, 9)。そこで、理想と義務を反映した意味になるよう、促進焦点動機には、「取り組みたい」を、予防焦点動機には、「しなければならない」、「すべき」の表現を用いた項目をそれぞれ作成した。

次に、制御焦点理論における促進焦点と予防焦点のそれぞれの行動制御モードを有する個人が経験しやすいポジティブ感情とネガティブ感情に関する言及(Scholer & Higgins, 2012)に基づき、向社会的

1) 27名の調査対象者は、他の削除対象の内容に該当する調査対象者と一部重複している。

行動の選択の結果によって生じる感情を含む項目を作成した(促進焦点動機:「喜びや満足」,「明るい気持ち」, 予防焦点動機:「心配や不安」,「居心地が悪い」)。

以上の項目作成の観点により, 促進焦点動機6項目(Table 2参照), 予防焦点動機6項目(Table 3を参照)を作成した。回答は, 7件法「1:まったくあてはまらない」から「7:とてもあてはまる」で尋ねた。

特性尺度 特性感謝と特性負債感は, 研究1と同様の変更を加えた対人的感謝尺度(藤原他, 2014)と, 心理的負債感尺度(相川・吉森, 1995)の項目で測定した($\alpha_s = .83, .93$)。

特性的な制御焦点を測定する尺度には, PPF5 邦訳版尺度(尾崎・唐沢, 2011)を用い, 16項目7件法で測定した(特性促進: $\alpha = .86$, 特性予防: $\alpha = .80$)。

接近ドライブと回避ドライブは, 行動抑制システム・行動接近システム尺度(BIS/BAS 尺度:安田・佐藤, 2002)より, 「接近ドライブ($\alpha = .85$)」と「回避ドライブ($\alpha = .73$)」の下位尺度を用いて測定した。どちらの下位尺度も5項目で構成されており, 「1.あてはまらない」から「4.あてはまる」の4件法で回答を求めた。

結果

制御焦点動機の測定項目の検討 促進焦点動機と, 予防焦点動機のそれぞれの項目が, 想定した概念として1つにまとまるかを検討した。制御焦点理論では, 促進焦点と予防焦点は互いに独立であると指摘される(尾崎・唐沢, 2011)ため, 各動機を測定する6項目ごとに, 主成分分析を行った(Table 2, Table 3)。

促進焦点動機を測定する6項目は, いずれの項目も高い成分負荷量を示し, 作成した項目にまとまりがみられることが示された。信頼性も十分な値が得られた($\alpha = .85$)が, 後の実験や調査における調査対象者の回答への負担を考慮し, 項目数を減らすこととした。各項目を削除した際の信頼性の値をもとに, 削除をしても信頼性が大きく減らない項目であった「その行動をとることは自分にも役立つことだと思った(削除後 $\alpha = .85$)」と, 「その行動は, 取り組みたいことだと思った(削除後 $\alpha = .85$)」の2項目を, 削除した。促進焦点動機は, 上記2項目を除いた4項目を用いることとした($\alpha = .85$)。

予防焦点動機を測定する6項目は, いずれの項目も高い成分負荷量を示し, 作成した項目にまとまりがみられることが示された。信頼性も十分な値が得られた($\alpha = .84$)が, 予防焦点動機に関しても, 実験や調査における調査対象者の回答への負担を考慮

Table 2
促進焦点動機の主成分分析

項目	成分
	1
上記の行動をとれば, 喜びや満足感を得られると感じた。	.84
上記の行動を行うことを想像すると, 明るい気持ちになれると感じた。	.82
上記の行動をとることは, 自分のためになると思った。	.81
上記の行動をとることは, メリットがあると感じた。	.74
上記の行動は, 自分にできる役立つ行動だと思った。(削除)	.69
上記の行動は, 進んで取り組みたい行動だと思った。(削除)	.67

Table 3
予防焦点動機の主成分分析

項目	成分
	1
上記の行動は, しなければならないことだと思った。	.80
上記の行動を行わないことは, 悪いことだと感じた。	.78
上記の行動をとらないことを想像すると居心地が悪く感じた。	.78
上記の行動は, 自分がすべき行動だと思った。	.77
上記の行動をとれば, 不安や心配を感じずに済むと感じた。(削除)	.76
上記の行動をとらないことのデメリットが気になると感じた。(削除)	.63

し、項目数を減らすこととした。各項目を削除した際の信頼性の値をもとに、削除をしても信頼性が大きく減らない項目であった「その行動をとらないことにデメリットを感じた（削除後 $\alpha=.85$ ）」と、「その行動をとれば、心配や不安を経験せずに済むと思った（削除後 $\alpha=.81$ ）」の2項目を、削除した。予防焦点動機は、上記2項目を除いた4項目を用いることとした（ $\alpha=.83$ ）。

各変数の構成 制御焦点動機の項目と各変数との関連を検討するため、次のように変数を構成した。「特性感謝」と「特性負債感」は、得られた評定値の平均値を得点とした。特性的な行動制御モードである、「特性促進」と「特性予防」は、下位尺度の構成項目ごとに評定値の平均値を算出し得点とした。「接近ドライブ」と「回避ドライブ」は、評定値の合計点を得点とした。「向社会的行動」は、3項目の評定値の合計点とした。研究2で用いた変数の平均値と標準偏差は、Table 4に示した。

各変数の相関関係の検討 全体データおよび向社会的行動の対象者との関係性による分割データごとに、「促進焦点動機」、「予防焦点動機」、「特性感謝」、「特性負債感」、「特性促進」、「特性予防」、「接近ドライブ」、「回避ドライブ」、「向社会的行動」の間の相互の相関係数を求めた（Table 5）。促進焦点動機と予防焦点動機の間、特性感謝と特性負債感の間、特性促進と特性予防の間のそれぞれに、有意な正の相関がみられた。接近ドライブと回避ドライブの間には、有意な相関は見られなかった。

各変数の偏相関関係の検討 各変数の相関係数の値をもとに、制御焦点動機の2変数と、特性感謝、特性負債感、特性的な制御焦点の2変数のそれぞれとの関係を検討する際には、検討する変数の対になる変数を統制変数として投入した偏相関分析を行うこととした。例えば、促進焦点動機と特性感謝との関係を検討する際には、予防焦点動機と特性負債感の2変数が統制変数となり、予防焦点動機と特性予防との関係を検討する際には、促進焦点動機と特性促進の2変数が統制変数となる。

制御焦点動機の2変数とその他の変数との間の偏相関係数を算出し、制御焦点動機の内容的妥当性を検討した（Table 6）。

全体データにおける変数間の偏相関関係 促進焦点動機は、特性感謝（ $r_p=.24, p<.001$ ）、特性促進（ $r_p=.26, p<.001$ ）のそれぞれと有意な正の偏相関係数を示し、回避ドライブ（ $r_p=-.17, p<.01$ ）とは、負の偏相関係数を示した。予防焦点動機は、特性感謝（ $r_p=.13, p<.05$ ）、特性負債（ $r_p=.18, p<.01$ ）、特性予防（ $r_p=.13, p<.05$ ）、向社会的行動（ $r_p=.35, p<.001$ ）のそれぞれと有意な正の偏相関係数を示し、接近ドライブ（ $r_p=-.16, p<.05$ ）とは、負の偏相関係数を示した。

「友人」データにおける変数間の関係 向社会的行動の対象者との関係性（友人・他人）ごとに全体のデータを分割し、変数間の関係を検討した。「友人」データ、「他人」データのどちらにおいても、偏相関係数を算出した。統制変数の投入は、全体

Table 4
研究2における変数の平均値と標準偏差

		平均値（標準偏差）				平均値（標準偏差）	
促進焦点動機	全体	4.65	(1.30)	特性促進	全体	4.57	(1.11)
	他人	4.40	(1.29)		他人	4.58	(1.15)
	友人	4.94	(1.26)		友人	4.55	(1.08)
予防焦点動機	全体	5.17	(1.26)	特性予防	全体	4.43	(1.02)
	他人	4.82	(1.33)		他人	4.20	(1.04)
	友人	5.55	(1.05)		友人	4.68	(0.93)
特性感謝	全体	5.58	(1.00)	接近ドライブ	全体	11.73	(3.21)
	他人	5.58	(1.03)		他人	11.85	(3.32)
	友人	5.59	(0.97)		友人	11.60	(3.10)
特性負債感	全体	4.06	(0.62)	回避ドライブ	全体	13.53	(2.64)
	他人	4.06	(0.61)		他人	13.12	(2.47)
	友人	4.06	(0.63)		友人	13.98	(2.76)
向社会的行動	全体	2.43	(0.83)				
	他人	2.19	(0.97)				
	友人	2.71	(0.51)				

Table 5
変数間の相関行列

		促進焦点 動機	予防焦点 動機	特性感謝	特性 負債感	特性促進	特性予防	接近 ドライブ	回避 ドライブ	向社会的 行動
促進焦点 動機	全体	1								
	他人	1								
	友人	1								
予防焦点 動機	全体	.57**	1							
	他人	.60**	1							
	友人	.47**	1							
特性感謝	全体	.40**	.37**	1						
	他人	.40**	.41**	1						
	友人	.42**	.36**	1						
特性 負債感	全体	.23**	.31**	.36**	1					
	他人	.25**	.30**	.41**	1					
	友人	.22*	.38**	.31**	1					
特性促進	全体	.30**	.16*	.29**	.17**	1				
	他人	.24**	.21*	.35**	.15	1				
	友人	.39**	.11	.21*	.18	1				
特性予防	全体	.12	.17**	.05	.27**	.31**	1			
	他人	.04	.06	.09	.22*	.30**	1			
	友人	.11	.17	-.01	.36**	.34**	1			
接近 ドライブ	全体	.04	-.10	-.07	-.12	.16*	-.12	1		
	他人	.00	-.05	-.06	-.05	.14	-.10	1		
	友人	.11	-.17	-.07	-.21*	.19*	-.14	1		
回避 ドライブ	全体	-.17**	-.06	-.13*	-.06	-.18**	.39**	-.07	1	
	他人	-.27**	-.21*	-.10	.01	-.10	.44**	-.14	1	
	友人	-.16	.00	-.16	-.13	-.27**	.30**	.01	1	
向社会的 行動	全体	.30**	.45**	.25**	.08	-.03	-.04	-.13*	-.08	1
	他人	.34**	.48**	.36**	.13	.00	-.11	-.11	-.19**	1
	友人	.11	.17	.07	.00	-.08	-.17	-.18*	-.07	1

** $p < .01$, * $p < .05$ Table 6
制御焦点動機と各変数との偏相関係数

		特性感謝	特性負債感	特性促進	特性予防	接近 ドライブ	回避 ドライブ	向社会的 行動
促進焦点 動機	全体	.24***	-.00	.26***	-.05	.12	-.17**	.07
	他人	.20*	-.02	.16	-.05	.04	-.18*	.07
	友人	.30**	-.01	.40***	-.10	.22*	-.18	.03
予防焦点 動機	全体	.13*	.18**	-.05	.13*	-.16*	.05	.35***
	他人	.18*	.12	.07	.03	-.06	-.07	.37***
	友人	.14	.28**	-.14	.18	-.25**	.09	.14

注) 促進焦点動機との関係の検討では、予防焦点動機と、検討する変数と対になる変数を統制変数として投入した。
 予防焦点動機との関係の検討では、促進焦点動機と、検討する変数と対になる変数を統制変数として投入した。
 向社会的行動との関係の検討では、促進焦点動機か予防焦点動機的一方を統制変数として投入した。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

データの時と同様であった。

促進焦点動機は、特性感謝 ($r_p = .30, p < .01$)、特性促進 ($r_p = .40, p < .001$) のそれぞれと有意な正の偏相関係数を示し、接近ドライブ ($r_p = .22, p < .05$) とも、有意な正の偏相関係数を示した。予防焦点動機は、特性負債 ($r_p = .28, p < .01$) と有意な正の偏相関係数を示し、接近ドライブ ($r_p = -.25, p < .05$) とは、負の偏相関係数を示した。

〔他人〕データにおける変数間の関係 促進焦点動機は、特性感謝 ($r_p = .20, p < .05$) と有意な正の偏相関係数を示し、回避ドライブ ($r_p = -.18, p < .05$) と、有意な負の偏相関係数を示した。予防焦点動機は、特性感謝 ($r_p = .18, p < .05$) との間、向社会的行動 ($r_p = .37, p < .001$) との間のそれぞれに有意な正の偏相関係数を示した。

考察

研究2では、状態論における制御焦点理論を扱うため、促進焦点動機と予防焦点動機を測定する項目を作成し、特性感謝、特性負債感との関連を検討した。

状態論における行動制御モードの測定項目 状態的な行動制御モードを測定するため、促進焦点動機と予防焦点動機の2点の動機を測定する項目を作成した。促進焦点動機は、全体データおよび向社会的行動の対象者との関係性(友人・他人)による分割データの大部分において、特性促進との間に正の関係が見られた。予防焦点動機は、全体データにおいて特性予防との間に正の関係がみられた。

また、「他人」データにおける促進焦点動機と特性促進との関係に有意性はなかった。これは予想と異なる結果であるが、この変数間の偏相関係数を確認すると、有意性の有無は異なるが、偏相関係数の値自体は、全体データにおける値と正負の方向に大きな差はない結果であった。このことから、有意性の検定において、データ数の不足により、有意にはならなかった可能性がある。

制御焦点動機と行動抑制/行動促進理論の「接近ドライブ」と「回避ドライブ」との間の関係は、予想と反対の結果を示した。当初の予想では、促進焦点動機と接近ドライブ、予防焦点動機と回避ドライブのそれぞれの間に正の関係を予想したが、実際には、促進焦点動機と回避ドライブ、予防焦点動機と接近ドライブとの間に負の関係が見られた。

制御焦点動機と接近ドライブ、回避ドライブとの関連は、一見して予想と異なる結果であるが、本質的には、予想と一致する内容であったと考えられる。接近ドライブと回避ドライブの特徴に基づけば、促

進焦点動機と回避ドライブの内容と、予防焦点動機と接近ドライブの内容は、それぞれ相反する内容であるため、負の関係が示されても、予想と大きく乖離するものではないと考えられるからである。

〔友人〕データにおける促進焦点動機と「接近ドライブ」と「回避ドライブ」との関係は、接近ドライブの間に正の関係が示され、回避ドライブとの間には有意な関係が示されなかった。これは、全体データが示す結果と異なり、予想を支持する結果であった。この点に関しても、接近ドライブ、回避ドライブの内容の点と、全体データでの結果との比較に基づき、偏相関係数の正負や大きが大きく異なるものではないので、予想と大きく矛盾した結果ではないと考えられる。

制御焦点動機を測定した項目は、関連が予想された変数と、予想を支持する一定の関係性を示した。この結果から、状態論として制御焦点理論を捉えたときの、向社会的行動に関する制御焦点動機の項目作成に成功したと考えることができる。

特性感謝、特性負債感と制御焦点動機との関係 特性感謝は、全体データ、分割データ共通して、促進焦点動機との間に正の関係が見られた。特性感謝と、予防焦点動機との間の関係は、全体データおよび他人データにおいて、有意な正の関係がみられた。友人データにおいては、有意な関係は示されなかったが、他のデータにおける偏相関係数の値や正負の方向などに大きな差がある結果ではないため、検定におけるデータ数の不足により、有意に至らなかった可能性がある。

特性負債感は、いずれのデータ区分においても、促進焦点動機との間には有意な関係が示されなかった。特性負債感と予防焦点動機は、全体データおよび友人データにおいて、有意な正の関係が見られた。他人データにおける、特性負債感と予防焦点動機との間の関係は、有意ではなかったが、前述の通り、他のデータにおける偏相関係数の値や正負の方向に大きな差がみられるわけではないため、データ数の不足により有意に至らなかった可能性がある。

特性感謝、特性負債感と、促進焦点動機、予防焦点動機との間の関係は、Mathews & Shook (2013) が指摘するような一対関係にはないことが明らかになった。

総括

本論文は、2つの調査研究により、感謝感情と負債感情の共起を前提とし、Mathews & Shook (2013) の研究を改めて検討した。また、制御焦点動機の測

定項目を作成した。制御焦点動機の項目は、関連が予想される変数間で、想定される関係性をおおよそ示した。制御焦点動機を測定するための、一定程度の妥当性がある項目が作成された。

特性感謝、特性負債感と、制御焦点理論における行動制御モードの関係は、特性論(研究1)、状態論(研究2)のどちらにおいても、一対関係は示さなかった。また、特性感謝、特性負債感、特性的な行動制御モードと、状態的な行動制御モードとのそれぞれの間で、異なる関係性を示した。特性的な行動制御モードとの関係の検討(研究1)では、特性感謝は特性促進と、特性負債感、特性促進、特性予防、両方の行動制御モードとの関連を示した。状態的な行動制御モードとの関係の検討(研究2)では、特性感謝は促進焦点動機と予防焦点動機、両方の行動制御モードとの関連を示し、特性負債感、予防焦点動機との間に関連を示した。特性と状態との間で一貫した研究結果には至らなかった。

Mathews & Shook (2013)とは異なり、感謝感情と負債感情が共起している場合には、一対関係は見られないことが明らかになった。これに加えて、状態論として制御焦点理論を扱ったことにより、特性感謝、特性負債感、被援助経験後に受益者が実行する向社会的行動の制御焦点動機と関連することが明らかになった。特性感謝と特性負債感、特性論であることから、援助場面における向社会的行動の選択よりも、因果的に先行するものである。従って、Mathews & Shook (2013)とは反対方向の因果、つまり、感謝感情、負債感情や特性感謝、特性負債感の高低が、個人の行動制御モードの選択に影響を与えることを示唆する結果となったのであろう。

本論文の課題 促進焦点動機と向社会的行動との間と、予防焦点動機と他人に対する向社会的行動との間に関係性が確認できなかった点に関して課題も残った。促進焦点動機と予防焦点動機は、向社会的行動を行ったことに対する理由を尋ねる形式で測定したが、向社会的行動との間に関係が示されなかった。

この結果は、本研究で用いた援助場面のビネットにおいて、向社会的行動の実行の際に調査対象者に対してかかるコストが明示されていなかったために、向社会的行動を行う理由がすべて規範的あるいは義務的になったからであると考えられる。データの収集に用いた援助場面のビネットは、自転車を倒した友人または他人を提示するものであり、この場面には、向社会的行動を行う際に、調査対象者にかかるコストの提示がなされていなかった。向社会的行動の実行にかかるコストとは、例えば、向社会的

行動を行うことにより遅刻のリスクが高まることや、自転車の倒れている数が多く肉体的に重労働になることなどがあげられる。これらのコストがかかるビネットの内容となっていなかったために、向社会的行動をとるかどうかの判断が、社会規範に従ったものになってしまった可能性がある。

本研究が用いた援助場面のビネットに向社会的行動の実行に伴うコストの設定がなかったことは、研究1と研究2における特性感謝、特性負債感と、特性、状態それぞれの行動制御モードとの関連が一貫していないことの原因ももたらす。それは、向社会的行動の実行にかかるコストの提示がなかったために、義務や規範的な回答傾向が強まったことである。

特性感謝は、特性促進と関連を示したが特性負債とは関連を示さなかった一方、状態的な行動制御モードとの関連では、特性感謝は、促進焦点動機、予防焦点動機の両方と関連を示した。特性負債感、特性促進、特性予防の両方と関連を示したが、状態的な行動制御モードとの関連では、予防焦点動機との関連のみ示した。この結果は、特性的な関連の検討から、状態的な関連の検討において、義務や規範的な予防焦点的な行動制御モードに基づく回答傾向が強まった結果であると読み取れる。特性感謝は、特性水準において予防焦点的な行動制御モードとは関連を示さないが、ビネットの内容が義務や規範的な回答を生み出した結果、予防焦点動機との関連をも示したのであろう。特性負債感、特性水準において促進焦点的、予防焦点的な行動制御モードのどちらとも関連を示していたが、ビネットの内容が義務や規範的な回答を生み出した結果、予防焦点動機との関連が一層強まったことにより、促進焦点動機との関連を示さなくなったのであろう。

以上を踏まえ、向社会的行動の実行にコストのかかるビネットを用いることにより、向社会的行動と制御焦点動機との間にどのような関連がみられるか検討する必要がある。

引用文献

- 相川 充(1988). 心理的負債に対する被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, 58, 366-372.
- 相川 充・吉森 護(1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, 11, 63-72.
- Algoe, S. B., Haidt, J., & Gable, S. L. (2008). Beyond reciprocity: gratitude and relationships in everyday life. *Emotion*, 8, 425-429.
- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and

- prosocial behavior helping when it costs you. *Psychological Science*, 17, 319-325.
- Crowe, E., & Higgins, E. T. (1997). Regulatory focus and strategic inclinations: Promotion and prevention in decision-making. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 69, 117-132.
- Emmons, R. A., & Shelton, C. M. (2002). Gratitude and the science of positive psychology. *Handbook of positive psychology*, 18, 459-471.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成. *教育心理学研究*, 62, 187-196.
- Freud, S. (1998). *Jenseit des Lustprinzips*. (A. Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris, & O. Isakower, Eds.), Frankfurt: S. Fischer. (Original work published 1920) (フロイト, S. 須藤訓任 (訳) (2006). 快楽原則の彼岸. 新宮一成・鷺田清一・道旗泰三・高田珠樹・須藤訓任 (編) フロイト全集17 (pp.53-125) 岩波書店)
- Greenberg, M.S. (1980). A theory of indebtedness. In K. Gergen, M.S. Greenberg & R. Willis (Eds.), *Social exchange: Advances in theory and research* (pp.3-26). New York: Plenum Press.
- Greenberg, M. S., & Frisch, D. M. (1972). Effect of intentionality on willingness to reciprocate a favor. *Journal of Experimental Social Psychology*, 8, 99-111.
- Henderson, K. A. (2009). *Increasing gratitude, well-being, and prosocial behavior: The benefits of thinking gratefully* (doctoral dissertation). Hofstra University, New York.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. In M. P. Zanna (Ed.) *Advances in experimental social psychology* (Vol. 30, pp. 1-46). New York: Academic Press.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011). 感謝の構造——生起状況と感情体験の多様性を考慮して——. *感情心理学研究*, 18, 111-119.
- Mathews, M. A., & Shook, N. J. (2013). Promoting or preventing thanks: Regulatory focus and its effect on gratitude and indebtedness. *Journal of Research in Personality*, 47, 191-195.
- McCullough, M. E., Emmons, R. A., & Tsang, J. A. (2002). The grateful disposition: A conceptual and empirical topography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 112-127.
- McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B. (2001). Is gratitude a moral affect?. *Psychological Bulletin*, 127, 249-266.
- 尾崎由佳 (2011). 制御焦点と感情. *感情心理学研究*, 18, 125-134.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性——制御焦点理論に基づく検討——. *心理学研究*, 82, 450-458.
- Peng, C., Nelissen, R. M., & Zeelenberg, M. (2018). Reconsidering the roles of gratitude and indebtedness in social exchange. *Cognition and Emotion*, 32, 760-772.
- Scholer, A. A., & Higgins, E. T. (2012). Too much of a good thing? Trade-offs in promotion and prevention focus. In R. M. Ryan (Ed.) *The Oxford handbook of human motivation* (pp.65-84). Oxford: Oxford University Press.
- Summerville, A., & Roese, N. J. (2008). Self-report measures of individual differences in regulatory focus: A cautionary note. *Journal of research in personality*, 42, 247-254.
- Tsang, J. A. (2006). The effects of helper intention on gratitude and indebtedness. *Motivation and Emotion*, 30, 198-204.
- Watkins, P. C. (2014). *Gratitude and the good life*. New York: Springer.
- Watkins, P. C., Scheer, J., Ovnicek, M., & Kolts, R. D. (2006) The debt of gratitude: Dissociating gratitude and indebtedness. *Cognition and Emotion*, 20, 217-241.
- 安田朝子・佐藤 徳 (2002). 行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性の検討. *心理学研究*, 73, 234-242.
- 吉野優香・相川 充 (2018). 被援助場面で経験される感謝感情と負債感情の生起過程モデルの検討. *心理学研究*, 88, 535-545.

(受稿 3月29日：受理 5月30日)